或る児童養護施設で暮らす子どもの身体的他者関係

—フッサールの身体論を手がかりとして—

学校教育開発学コース　大　塚　　類

Die leibliche Beziehung des Kindes mit den Anderen in einer Fürsorgeanstalt
Nach Husserls Lehre von dem Leib

Rui OTSUKA

Es ist empirisch und auch in vielen Bereichen wie u.a. Entwicklungspsychologie schon bekannt, dass viele Kinder, die aus irgendwelchen Umständen von Eltern nicht gepflegt worden sind, die intensiven leiblichen Berührungen mit Erwachsenen erheischen wollen. Im vorliegenden Aufsatz soll dagegen vornehmlich anhand Husserls Lehre von dem Leib durch ein Fallstudium von einem unter solchen Kindern in einer Fürsorgeanstalt die langfristige Entfaltung seiner leiblichen Beziehungen mit der Autorin selbst aufgeklärt werden. Daraus ergibt sich, dass für dieses Kind die intensiven leiblichen Beziehungen mit Anderen nicht ein Kompensationsverhalten für die früher ihm nicht gezeigte Liebe seiner Mutter ist, sondern dass ihm diese Beziehungen folgende Möglichkeiten bieten：1. Sie lassen vielmehr den beiden Leib und die beide Welt aufeinander „intentional übergreifen" und das Kind lebt mit Anderen in einer und derselben Welt zusammen. 2. Die Erscheinung seiner Welt wird leibhaftiger und stabiler. Und 3. Es kann sich mit Anderen feinfühlig benehmen. Als Fazit wird es klar, dass die Beziehung zwischen einer Mutter und ihrem Säugling bzw. Kind für sein Bewusstsein eine wichtige Rolle spielt, das in der intersubjektiven Welt leben kann.

目　　次

はじめに
Ⅰ　身体的な感覚を他者と共有すること
Ⅱ　他者と調和的な身体関係を生きること
Ⅲ　共通の世界を創り出す身体的な関わり合い
Ⅳ　他者と同じ一つのキネステーゼ的身体として生きること
おわりに

はじめに

乳幼児期に親から充分な愛情を与えられなかった，あるいは様々な理由から家庭で育てられなかった子どもは，おとなとの身体的な接触を強く求める，と一般的に言われている。本稿で考察する或る児童養護施設でも，様々な理由から親と共に暮らせない子どもたちが生活しているが，幼児のみならず小学生や中学生でさえも，養育者をはじめとするおとなとの身体的な関わり合いをしばしば強く求める。事実，絶えずおとなに抱っこされることを求め，一旦抱かれるとしがみついて離れようとしない子どもや，あたかもおとなの身体へと没入しようとするかのように全身で抱きついてくる子どももいる。児童福祉研究においては，乳幼児期の母子の一体的な関係や愛着の問題と，それらの重要性についての考察や記述や主張が，少なからぬ割合を占めている(金子，1994等)。また，母性的養育という観点から，ボウルビィは，「長期にわたる母性的養育の喪失は，子どもの性格に，また子どもの全生涯に，いちじるしい影響を与える」(ボウルビィ，p.40)，という。

こうした仕方で母子の一体的関係について語られる時には，乳幼児期に母親から充分に抱かれたり，微笑みや声かけを伴った身体接触を存分に与えられることの重要性が含意されている。しかし，身体接触を伴う母子関係についての経験的事実の積み重ねや，発達心理学研究の成果を越えて，おとなとの身体接触が子ど

もの他者経験や他者関係にとっていかなる意味を持ち，いかなる影響を具体的に与えているのかについては，筆者の知る限り，ほとんど考察されていない。例えば，児童期以降の子どもがおとなに身体接触を強く求めることを，乳幼児期に得られなかった愛情のいわゆる代償行為とみなすことにより，その原因は理解できたとしても，当の子ども自身にとってのこの行為の意味はとらえられない。

本稿では，フッサールの身体論と，それに依拠した中田の身体的他者関係の記述に基づき，優斗君(仮名，以下同様)と筆者との数年間にわたる関わり合いの記録を介して，彼の他者関係と意識の変化とを考察する。1歳半から約7ヶ月にわたり乳児院で養育された後，児童養護施設で生活している優斗君は，抱っこやおんぶや手繋ぎ等の身体的他者関係を頻繁に求めると同時に，こうした関係を長期間にわたって生きている子どもである。

I　身体的な感覚を他者と共有すること

他者との身体的な関わり合いについて考察する際に見逃されてならないことは，それが子どもの世界に相互主観性とリアリティとをもたらす重要な契機となっている，ということである。フッサールも述べているように，そもそも身体は「方向定位〔のため〕の原点(Orientierungspunkte Null)」であり，「純粋自我がこの原点から，空間とあますことなき感覚世界とを直観する(anschauen)」(Husserl, 1952, S.56〔　〕内引用者，以下同様)。それゆえ，空間的事物の知覚の際に身体に生じる「諸感覚は，それらを組み込んでいる統握(Auffassung)によって，それに対応するという仕方で事物そのものを射映している諸特徴を構成する」(a.a.O.,S.57)。すなわち我々は，自分の身体でもって世界を構成しつつ，その世界内で身体的に活動しながら生を営んでいる。このことから，筆者と知り合って間もない頃の優斗君(3歳7ヶ月)にとって，筆者という他者と身体的な感覚を共有することがいかなる意味を持っていたのかが明らかとなる。

ベランダには，土だけが入ったプランターが置かれており，その前にしゃがみ込んだ優斗君は，おそるおそるといった感じで土にさわっている。のぞいている私に気がつくと，優斗君はにっこりと笑って手招きをする。私が傍まで行くと，優斗君は泥を握りしめた両手を私の方にかかげながら，「お姉ちゃんもさわって」，と嬉しそうに言う。「手が汚れるから嫌だなぁ…」。私がそう言って渋っていると，優斗君は，小さな泥の塊を無理やり私の手の中に入れた。私がしかめ面をすると，優斗君は，「ね？気持ちいいでしょ」，と楽しそうに笑う。次に優斗君は，プランターに両手を突っ込んで，中の泥をかき回し始めた。「ほら，お姉ちゃんも～。気持ちいいよ～」。大きな目を細めて笑う彼の笑顔につられて，私もしゃがみ込み，優斗君と一緒に両手で泥をかき回す。優斗君の言う通り，泥は程よくひんやりとしていて気持ちがいい。「ほんとだね。冷たくって，気持ちがいいね」。私がそう言って微笑むと，優斗君は誇らしげな表情でにっこりと笑う。

筆者にも泥をさわらせようとする彼の行為は，「気持ちいい」感覚を筆者と共に味わいたい，という彼の想いに裏打ちされている。こうした身体感覚の特質を明らかにするため，フッサールはまず，「空間事物的な客観を経験する」身体が「それに関与している(mit dabei sein)」(a.a.O.,S.144)際に，例えば，私が手でもって，「机の硬さ，冷たさ，滑らかさを経験する」(a.a.O.,S.146)際に，身体に生じる感覚に注目する。すなわちこの時，「私はいつでも手に注意を向け，手のひらに触感覚を，すなわち，滑らかさや冷たさの感覚等」と同時に，私の「手の内部において，〔私によって〕経験されている動きと平行して経過している運動感覚等々」(ebd.)さえをも見出すことができる。フッサールは，「身体の『表面』と『内部』」とに生じるこうした感覚(Empfindung)を「特殊な身体的出来事」(ebd.)とみなし，以下のような特質を考慮して，「再帰的感覚(Empfindnis)」と呼んでいる(a.a.O.,S.145)[1]。すなわち，再帰的感覚は，「身体」が何らかの「感覚を感じ取る箇所で，その感覚を感じ取っている時に」発現する(a.a.O., S.146)。それゆえ，再帰的感覚は，さわる者とさわられる物との間で生じるこうした同時性と同質性とを備えていることになる。

上述の記録において，泥を握りしめている優斗君と筆者の手のひらに感じられていたのは，泥の冷たさや泥特有の柔らかな質感と同時に，同時的で同質的な再帰的感覚である。しかも，こうした各再帰的感覚は，別々の身体上に生起しているとはいえ，等しい(gleich)感覚でもある。しかし両者は，その等しい感覚に対して異なる感想を抱いている。すなわち，手で泥を握る感覚を「気持ちいい」と感じている優斗君は，筆者も同様に感じていることを当然のように想定しているのに対し，筆者は，こうした感覚を「気持ちいい」ものとして味わうことができない。それゆえ，この時の両者に

は等しい再帰的感覚が生じているにもかかわらず，両者がこの感覚を共有しているわけではない。

しかしその後，共に泥を両手でかき混ぜている優斗君と筆者の手から腕にかけては，泥の重たさや冷たさの感覚，手の運動に伴う運動感覚といった，等しい再帰的感覚が生じることとなる。しかもこの時には，優斗君と同様筆者も，自分自身の身体に生じた再帰的感覚を,「気持ちいい」感覚として他者と共に味わう，という仕方で共有してもいる。

この記録当時の優斗君にとって，知り合って間もない筆者は，誰にでも代替可能な他者として現われているはずである。しかし彼は，筆者と同じ身体的行為を実現すると同時に，等しい再帰的感覚を共有しようとする。彼のこの行為は，身体を介して，自分自身と他者とを能動的に重ね合わせようとすることを意味している。そして，こうした仕方で他者との重なり合い(Deckung)を創り出すことは，以下で考察するように，優斗君の他者関係において非常に大きな意味を持っている。

例えば，他者の想いを理解しえない時，我々は，その他者の立場に自分の身を置いて考えることがある。しかし，こうした感情移入(Einfühlung)による他者理解では，自分で自分をとらえる可能性の範囲を超えることができないため，自分とは異なる存在である他者を真に理解することにはならない。ところが，この試み自体によって私自身が何らかの作用を蒙るならば，事態は変わってくる(vgl. 中田, 2003, p.123)。というのも，再帰的感覚を伴うような具体的な身体活動を介する場合に特に顕著となるように，自分自身を他者に重ね合わせることによって，それまでとは異なる仕方で自己が触発されるならば，私にとって初めてみえてくるものや，初めて理解できることも生じてくるからである。

この記録当時の優斗君は，他の場面でも，等しい再帰的感覚を筆者と共有するという仕方で，彼自身と筆者とを能動的に重ね合わせようとしていた。これらのことからも，彼が，筆者と心を通じ合わせ，筆者との関係をより安定させようとしていた，と考えられる。通常我々は，互いに自分について語ること等を介して，他者との間で相互理解を深めようとする。しかし，当時3歳であった優斗君にはこのことが困難であるからこそ，身体を介した自他の重なり合いを生み出すことによって，筆者との間で相互理解を深めようとしたのであろう。というのも，身体によって空間的事物や世界が構成されている以上，身体こそが，我々のあらゆる経験にリアリティを与えているからである。しかも，同じ身体的行為による自他の重なり合いは，心を通じ合わせることだけでは得られない等しい再帰的感覚を他者と共有する，ということを可能ならしめるだけではない。自らの身体に生じるこうした諸感覚によって世界を構成している我々の各々が，自分の身体によって構成される世界内に，自分の身体だけではなく他者の身体もが同時に含まれていることを知覚しているならば，両者の身体は同じ一つの(dieselbe)世界を構成していることにもなる。

このことを知覚作用に即して記述するならば，以下のようになる。外的物体の知覚の場合と同様，私が自分の身体の或る部分を知覚している時にも，現われの連続的で多様な変化の一局面(Aspekt)としての原印象(Urimpression)と共に，すでに原印象ではなくなってしまった射映を現在においてなおも保持し続ける過去把持(Retention)と，いまだ現われていないが，これから来たるべき射映を志向している未来予持(Protention)とによって把捉されているものも，同時に総合統一化されている。この時，私と共にいる他者の知覚作用においても，私と同様の仕方で，私の身体物体が知覚対象として総合統一化されているならば，両者の身体物体は，自他にとって同じ一つの世界に存在することになる。同様のことは，他者の身体物体を私と他者とが知覚する場合にも生じる。したがって，私と他者のそれぞれが，互いの身体を同時に知覚し合っている時，両者は，互いに同じ一つの世界に存在していることをリアルに体験できることになる。

この記録においても，優斗君と筆者とが，等しい(gleich)再帰的感覚と同じ泥とを共有している世界内で，互いの手の動きを同時に知覚している限り，それらをそれぞれの世界内の実在物たらしめている両者の世界は，同じ一つ(dieselbe)の世界となっている。すなわち，自他の身体を重ね合わせつつ，互いの身体を相互に顕在的に知覚することは，それぞれが身をもって生きている感性的世界を重ね合わせ，その世界を共有しつつ共に生きることをも意味する。したがって，この時の優斗君にとって，彼自身の生きている感性的世界さえもが，筆者と同じ一つの世界として現われてくることになる。

以上のことからすると，乳幼児期の母子の一体的関係においては，両者にとって，互いの世界が同じ一つの一体的な世界として現われてきているならば，この関係は，単に母子の絆を創り出すのみならず，我々が自明としている相互主観的な世界や意識の在り方の成

立に対し重要な役割を果たしていることが明らかとなる。それゆえ，優斗君のように乳児期に密接な身体的他者関係を体験できなかった子どもには，相互主観的な意識としてリアリティのある世界を生きることさえもが充分に保障されていないことになる。そうであるからこそ，彼らにとって，或る行為を共にしている他者との間で同じ一つの世界を生きられるようになることが，何よりもまず必要となる。そして，この時の優斗君も，たとえ短い時間であったとしても，自分だけではなく他者によっても世界が支えられている，という意味での相互主観的な世界を，筆者と共に顕在的に生きようとしたのではないだろうか。また，優斗君は，他者との間でそのつどこうした経験を積み重ねることにより，他者と同じ一つの安定した世界を少しずつ生きられるようになっていったのではないだろうか。

Ⅱ　他者と調和的な身体関係を生きること

当時の優斗君にとって，他者との身体接触は，彼のそのつどの他者理解や世界の安定化の基盤となっているにすぎなかった。しかし，こうした他者関係は，次第に，優斗君の意識に非常に重要な影響を与えるようになる。例えば，抱っこではなく手を繋いで一緒に歩くだけで満足できるようになった優斗君（5歳12ヶ月）は，自分と共に行動して欲しいという想いを言葉でも態度の上でも表現できるようになっていた。次の記録は，こうした優斗君が，昼食中に他の子どもと喧嘩をして養育者に叱られ，食欲を失っている場面である。

優斗君は，ほとんど手がつけられていない食事を前にして，少し苛立った様子で座っている。「優くん，一緒にご飯食べよう」。私が彼の隣に移動しながらそう言うと，優斗君はふてくされたような表情のまま私を一瞥し，またすぐに食事の方へ視線を落とした。「お腹空いてないの…」。優斗君は弱々しい声でそう言うと，力尽きたかのようにテーブルに頭を乗せた。優斗君の席に移り，自分の足の間に彼を抱くようにして座った私は，彼の口元にご飯とお肉を運ぶ。すると優斗君は，しぶしぶといった様子ではあるものの，口を小さく開けて食べてくれる。（中略）少しづつではあるが，優斗君は口まで運ばれたご飯を上手に食べる。そのうちに，優斗君は，「これと，これ」，等と言って，次に食べさせてもらいたい食事の中身を指定するようになった。椅子に私が座り，私の足の間の狭い空間に優斗君が座るという体勢のため，優斗君は何度も椅子から滑り落ちてしまう。しかし，その度に何も言わずに座り直す優斗君は，この窮屈な座り方を気に入っているようにみえる。（中略）何も喋らずにご飯を食べ続けた優斗君は，「ごちそうさまでした～」，と言うと，私から離れて外に出て行った。

この時の身体的な関わり合いについて考察するため，身体活動と物体の現われとの一体的生起としてのキネステーゼに関する，フッサールと中田の記述をまず手がかりとしたい。

我々が，或る物体を主題的に知覚したり，その物体に身体的に関わるためには，その物体を視覚野の中心部に収めなければならない。例えば，私が，それまでは視野の周辺部に在った或るノートに眼差しを移そうとする時，私の身体は，「視野の中心部でそれ〔＝ノート〕が私に注視されるようにというその要求に従って，…この可能性を実現する」（中田，2003，pp.95-96）ことになる。したがって，残像や映像の場合とは異なり，或る物体がリアルな実在物として知覚されるためには，その物体の「現われの変化を実現できるような身体運動の可能性へと私の身体が予めすでに投げ込まれている」（同，p.96）ことが必要となる。フッサールは，物体知覚における現われと身体活動とのこうした一体的調和をキネステーゼ（Kinästhese）と呼び，以下のように記述している。「知覚においてそのつど現われてくる物体の局面（Aspekt）が〔私に〕呈示されることとキネステーゼとは，〔時間の経過が〕並列的な過程ではない。むしろ両者は，次のように一緒に働く。すなわち，諸キネステーゼの局面，つまりキネステーゼ的-感性的全体状況としての諸局面は，キネステーゼの全体の活発な変化の一つひとつの中で，あれこれ個別のキネステーゼを活動させることによって，連続的に〔或る変化を〕要求されると共に，この要求をそれに見合った仕方で満たすことによってのみ，存在意味と物体の諸局面としての妥当性とを持つことになる」（Husserl，1962，S.108f.），と。すなわち，身体活動と物体の現われとのキネステーゼ的な一体的調和こそが，或る物体をリアルな，すなわち存在意味と存在妥当性とを備えた実在物として知覚することを可能ならしめている。

この記録時の優斗君と筆者は，重なり合うように身体を密着させながら同じ方向を向いているため，筆者が運んだ食物を優斗君が口にするためには，彼の協力が必要となる。すなわち，彼の口元に食物を運んでいる時の筆者の身体は，彼に上手に食物を食べさせる可能性へと予め投げ込まれており，この可能性を実現するという仕方でキネステーゼの能力を行使している。

そして同時に，優斗君の身体もまた，食物を上手に食べさせてもらう可能性へと予め投げ込まれつつ，キネステーゼの能力を行使することによって，この可能性を実現している。しかも，こうした関わり合いがスムーズに遂行されるためには，すなわち，相手の身体の動きに刺激されて自分の身体の動きを事後的に調節するのではなく，両者の身体の動きが一体的に実現されるためには，まず筆者は，食物を運ぶ自分の腕が優斗君のそれと同じような機能を果たすようにと，自らの腕の動きを未来予持的に調整しなければならない。他方，優斗君は，自分の頭や口等の動きが，その食物を運んでいる筆者の頭や口等であるかのように，自らの身体の動きを未来予持的に調整しなければならない。すなわち，優斗君と筆者は，あたかも二人で一人の人間であるかのように，それぞれのキネステーゼ的身体を一体的に調和させながら，身体の動きを変化させていることになる。

この時の優斗君と筆者の身体が，一つのキネステーゼ的身体としてこのように一体的に調和している以上，両者が投げ込まれている可能性もまた，一体的に生起していることになる。というのも，優斗君に上手に食物を食べさせるという筆者の可能性，あるいは，上手に食物を食べさせてもらうという優斗君の可能性，そのどちらの可能性も，どちらか片方の行為だけでは実現されえないからである。これらの可能性が共に実現されるためには，それぞれの行為が相手の行為によって補完されつつ，相手の行為を補足することが求められる。したがって，この事例における優斗君と筆者それぞれの可能性は，いわば上手に食べさせる-上手に食べるという一体的生起の可能性となっている，といえる。

しかも優斗君は，筆者の上半身を背もたれのようにして座っているため，彼の背中と筆者の上半身の広範囲にわたる接触部分には，からだの温もり，柔らかさ等の再帰的感覚が生じている。この時，両者がそれぞれの身体で感じている感覚は同時性と同質性を備えた同じ一つの感覚であり，両者の身体はまさに同じ一つの身体となっている。それゆえ，両者にとって，同じ一つのキネステーゼ的身体として一体的に機能することがより容易に可能となる。そもそも，自他が同じ一つのキネステーゼ的身体として一体的な生起の可能性を共に実現することができるのは，未来予持を介して来るべき現在へと，両者がこの身体を先行させているからである。上手に食べさせる—上手に食べるという一体的生起の可能性の実現を，再帰的感覚を共有しながら共に目指している優斗君と筆者は，この可能性が実現されるようにと自らの身体の動きを変化させつつ，相手の身体の動きに合わせて変化させられている。しかも，椅子から何度滑り落ちてもそのつど以前と同じように座りなおしていた優斗君は，たとえ主題的に意識していないとしても，筆者にもたれかかることによって生じる再帰的感覚を，筆者と共有し続けることになる。優斗君は，一つのキネステーゼ的身体として筆者の身体と一体的に調和しつつ，一体的生起の可能性を実現し続けている。すなわち，この時の両者の身体は，「いわばひとつの身体へと有機体化(Organisation)され」(中田, 1999, p.173)，一体的なキネステーゼの能力を遂行していたことになる。通常，我々の身体は，殊更身体的な接触をしなくとも，他者と同じ一つの目的を志向しながら機能することができる。しかし，優斗君のように，乳児期初期に自他の一体的状態や，自他にとって同じ一つの世界を生きることがなかった子どもの場合には，そのつどの現実的な他者との身体的な接触によって生じる再帰的感覚の共有に基づいて，初めて，充分な仕方で他者と一体的に機能することが可能となるのではないだろうか。

この記録の直前に養育者から叱られた優斗君は，眉をしかめて苛立った表情をしながら，食欲のみならず，彼自身の存在の充実感さえも失っているようであった。テーブルに頭を乗せてぼんやりとしているだけの優斗君の姿は，自分自身の存在を支えられなくなった彼の意識や身体の在り方を，如実に体現している。この時の優斗君の身体は，未来の可能性へと投げ込まれることさえかなわない程にその力を失っていた。我々が，自分の身体でもって世界内の諸物体を構成すると同時に，その世界内で身をもって生を営んでいる以上，自分自身の存在感さえ失いつつある優斗君にとっては，世界やその世界内の諸物体がリアリティを急速に失い，非常に不安定な仕方でしか現われていなかったのであろう。こうした彼の身体は，筆者と同じ一つのキネステーゼ的身体として機能することを介して，筆者の身体によって支えられることになる。このことにより，優斗君の世界とその世界内の諸物体とは，その生き生きとしたリアリティを取り戻すと同時に，彼が安心して生を営める程に安定した仕方で現われてくることになる。筆者に抱かれた優斗君には，それ以前には食べることのできなかった食事が，美味しそうなものとして際立って見えてくるようになり，実際に彼が口にした食物も，自分一人で食べる時とは比較にならないほどに，美味しく感じられたのではないだろうか。

我々にとって，自分の知覚対象が他者にも同様の存在意味と妥当性とを伴って存在していることは自明である。しかも，こうした自明性は，世界とその世界内の存在者の実在性が相互主観的に保障されていることに裏打ちされているため，我々が精神的・身体的に非常に大きな打撃を蒙った場合でも，感性的世界が極端に不安定な仕方で現われてくることはほとんどない。しかし，優斗君のように，世界が相互主観的に保障される度合いが非常に弱いと考えられる子どもの場合には，常に自分一人で世界を保持しなければならず，彼にとっての世界は，しばしば非常に不安定なものとして現われてこざるをえなくなる。こうした不安定さを共に支えくれるのが，他者との身体的に密接な関わり合いなのであろう。

Ⅲ　共通の世界を創り出す身体的な関わり合い

体調の悪い優斗君（6歳2ヶ月）と筆者との関わり合いを描いた以下の記録からは，他者との身体接触によって世界が安定する，ということの意味がさらに明らかとなる。

ソファーの背もたれに寄りかかりながらビデオを観ている私の背中に，優斗君は，何も言わないまま乗りかかり，私の右肩の上に顎を乗せ，からだの前面を私の背中にぴったりとくっつけるようにして，全体重を私にかけた。私も無言で，おんぶの時のように左手を彼のお尻にまわし，あやすように叩いた。しばらくの間そのままの体勢でビデオを観ていた優斗君は，自分の右手をもぞもぞと動かして私の右手を探って手を繋ぎ，微かに左右に振り始める。（中略）優斗君は私から離れ，私の隣でビデオを観始めた。私が自分の右側に優斗君の入る空間を作ると，彼は，私の右腕を持って自分のからだに巻き込むようにかかえて手を繋ぐと，私の腕の中に収まるような形で落ち着いた。優斗君は，私の手の感触を確かめるかのように，繋いだ手をもぞもぞと動かしては，何度も握りしめる。（中略）〔この体勢でビデオを観ながら〕10分位経った頃，優斗君は私の顔を一瞥すると，私の膝の上に座って抱っこされた。それからビデオが終わるまでの間，彼は私に抱かれたまま，時折私の方に振り向いては，「面白いね」，などと笑顔をみせた。

上述した身体と世界との関係からすると，体調が悪く自らの身体が思い通りにならない優斗君には，彼を支えている世界さえもが不安定で頼りないものと感じられているはずである。こうした状態にある優斗君が筆者に乗りかかることにより，両者は，広範囲にわたって生起し，互いにとって根源的に与えられている同じ一つの再帰的感覚を共有し合い，同じ一つの身体となる。フッサールが述べているように，例えば，手に生じる再帰的感覚は，「私たちにとって物質的な事物以上の，まさに手そのもの」(Hussserl, 1952, S.150)を感じさせてくれる以上，この時の優斗君は，筆者と共有している再帰的感覚によって，不安定な状態にあった身体をまさに自分の身体そのものとしてリアルに感じることができるようになる。それどころか，この再帰的感覚は，優斗君にとって，彼自身の身体のみならず，筆者の身体のリアリティをも同時に感じさせてくれる。したがって，筆者と同じ一つの身体となった優斗君は，互いの身体のリアリティに支えられつつ，不安定であった世界を安定した世界へと構成し直すことができた，と考えられる。

ではこの時，こうした仕方で構成し直される世界とは，いかなる世界なのであろうか。

知覚における身体の構成機能に着目しているラントグレーベに従えば，Ⅰで述べた知覚作用は，「流れる現在と共に総合される過去把持と未来予持」(Landgrebe, S.475)とによって，「原印象的な所与」が「根源的に総合される」(ebd.)，と言い換えられる。しかも，原印象的な所与は，「私がなす」という仕方で機能しているキネステーゼに由来している。したがって，意識が知覚対象を総合統一化でもって構成する前に，キネステーゼの遂行によって，予め「自我は根源的な仕方で目覚めさせられる」(a.a.O.,S.476)ことになる。ラントグレーベは，この呼び出しを「触発性(Affektion)」(ebd.)と呼んでいるが，それが身体的なものである以上，まず「感覚器官の触発性である」(a.a.O.,S.477)はずである。それゆえ，「展開した自我意識に先行して」(a.a.O.,S.478)，まず原印象的な所与が，キネステーゼ的身体活動によってもたらされた触発性を伴いつつ予め構成されていることになる。

ラントグレーベは，キネステーゼ的身体運動によってもたらされる触発性を，自我意識に到ることのない「覚知(Innesein)」と呼んでいる(ebd.)。しかも覚知は，「それに対する反省に先行しており，満たされた，もしくは満たされていない『身体感(Leibgefühl)』として，キネステーゼの遂行と一体になっている」(ebd.)。それゆえ，身体感としての「覚知は，単なる『感情』ではなく，触発している(affizieren)もの，そしてキネステーゼの運動がそこへと向けられているものの只中にある，

という状態を告示するもの」(ebd.)でもある。そして覚知が反省的に把握され，言葉で命名されることにより，「～の気分」や「～の感情」として，日常的生において主題的にとらえられることになる(vgl. 中田, 1993, p.133)。しかも覚知は，知覚を可能とする自我意識にも先立っているため，この自我意識に対して「まず最初に世界を開示する」(Landgrebe,S.478)。そもそも，それを背景として個々の物体が知覚されるのが感性的世界である以上，原印象的な所与こそが世界の「受動的構成契機」(ebd.)であることになる。そして，これら原印象的な所与を予め構成している身体がこの構成機能そのものを自ら覚知する，という仕方で，感性的世界はまず開示されるため，こうした世界を支えている「自然は，我々にとって，この身体的生起においておのずと自らを『告げ知らせる』もの以外の何ものでもない」(a.a.O.,S.479)。そしてこの時の世界とは，意識によって構成される以前のという意味で，「先構成(Vorkonstitution)」(a.a.O.,S.473)された世界のことでしかない。それゆえ，覚知によって先構成される世界もまた，意識の眼差しの前で，はっきりとした輪郭をもって展開している世界ではない。

このことから，筆者の背中に乗りかかることで身体の広範囲に局在化している再帰的感覚を享受していた時の優斗君にとって，世界の現われがいかなるものであったかを記述することが可能となる。すなわち優斗君は，画面やストーリーの変化に興味を持つ，という仕方でテレビ画面を主題的に知覚することなく，あたかもインクが水の中に拡散していく時のように，自分の存在している世界自体がぼんやりと滲んでいるように感じていた，と考えられる。すなわち，世界内のすべての存在者が先構成のレベルに留まっている，といえる。しかも，そうであるからこそ，優斗君には，自分の身体的な感覚のみがより一層際立って感じられることになる。この脱力状態を経て，優斗君は，筆者の背中から離れて筆者の腕の中に収まるように隣に並び，それから筆者の膝の上に抱かれた。このことから，優斗君の世界が筆者による支えを必要としない程に安定したことがわかる。確かに，一体となった優斗君と筆者の身体によって先構成されていた世界は，はっきりとした輪郭を持たず，原印象が常に流れ続けているだけでしかない世界である。しかし，優斗君の振舞いから見て取れるように，先構成された世界は，意識の志向的な構成作用によってこの世界から何らかの対象が主題化される際に，背景としてその対象の実在性を支えることになる。

抱っこという自他の一体的行為を実現しながら，ビデオを共に観ている時の優斗君と筆者は，同じ一つの身体として同じ一つの身体感を覚知している。この身体感が，各自に或る感情や気分として主題的にとらえられる以上，優斗君が筆者に向かって「面白いね」，と微笑む時，Ⅰで考察した時期とは異なり，彼は単に自分の想いを言語化することによって筆者に自分と同じ想いを共有してもらおうと願い，筆者の想いを確認しているわけではない。確かに，おとなである筆者は，ビデオの内容そのものを優斗君と全く同じように面白いと感じることはできないため，彼と筆者は同じ一つの気分に浸っているが，異なる感情を生きていたであろう。しかし優斗君は，筆者と同じ一つの身体感を覚知していることを基盤として同じ一つの気分を共有することにより，根源的な次元で筆者との精神的な一体感を享受することができている。そうであるからこそ，優斗君は，ビデオを共に観ている筆者が彼と同じ感情状態に陥らなくとも，身体的にも精神的にも筆者と共にビデオを観ていることを，色褪せずに感じ続けることができるのである。

ここまでで考察してきたように，他者と身体的に共に存在することは，同じ一つの再帰的感覚の共有を介して身体的な一体感を享受し合うと同時に，このことによって他者と同じ気分に浸る，ということをも意味している。優斗君を含めた児童養護施設で暮らす子どもたちの多くは，こうした仕方で他者との根源的な一体感を確かに感じることができなければ，心から安心して，例えばテレビという知覚対象を楽しむことができないようである。それゆえ，子どもたちは，身体的にも他者との一体感を強く求めるのであろう。

Ⅳ 他者と同じ一つのキネステーゼ的身体として生きること

広範囲にわたる再帰的感覚の共有に基づいて，そのつど出会うことになる他者との調和的な関係や同じ一つの世界を生きる，という経験を経て，優斗君(6歳5ヶ月)は，他者との柔らかで一体的な身体的な関わり合いを生きられるようになっていく。

優斗君はアメンボを取ろうとするが，アメンボは敏捷で，なかなか捕まえることができない。流れのほとんどない小川はとても浅く，川底に泥が溜まっているため，足を踏み入れると足首まで泥に嵌まり込み，自分一人で歩くことが難しい。片手に小さなバケツを持った優斗君は，目線を川面に落としたまま，

何も言葉を発さずに，空いている方の手を私に向かって伸ばす。私も何も言わず，空中で私の手を探っている優斗君の手を握る。そして私は，優斗君が歩きやすいようにと，彼の歩くペースに合わせながら，彼の動きを支える。優斗君は，できるだけ波を立てないように，抜き足差し足で，川の中をゆっくりと進む。他方，彼と手を繋ぎ，川縁ぎりぎりの場所を平行して歩いている私も，草を踏みしめる音ができるだけしないようにと，細心の注意を払って歩く。「音，立てちゃ駄目だからね。そ～っと歩いてね。アメンボいたら，すぐに教えてね」。真剣な眼差しを水面に注いでいる優斗君は，声をひそめてそう言う。私も彼と同様声をひそめ,「うん」，と一言答える。(中略)アメンボを見つけると，優斗君は私の手を離し，その動きをじっと見つめる。私もその場から動かずに，彼と同様に息をひそめ，アメンボを見失わないようにその動きを追う。息をひそめた優斗君は，アメンボの近くへと徐々にバケツを近づけていき，タイミングを見計らって周囲の水ごと掬い上げる。うまくアメンボを掬い上げることができると，私たちの間に張りつめていた緊張が一気に緩み，私たちは顔を見合わせて，「やったね！」，と歓声をあげる。(中略)私たちは，こうした行為を何度となく繰り返し続けた。アメンボに狙いを定めている優斗君の姿を，息をひそめて見つめているうちに，彼がこのアメンボをどのように取ろうとしているのか，あるいは，彼がこのアメンボを取れるかどうかが，私にも予感できるようになる。

中田は，たとえ身体の広範囲にわたる接触がない場合でも，複数の人間が身体的に作用を及ぼし合いながら，同じ一つの雰囲気を生きている時の存在様式である「相互内存在」について，次のように記述している。すなわち，共通の生を営みつつ，相互に作用を及ぼし合っている複数の人間によって「産出されると同時に生きられている」場において,「彼らのキネステーゼ的身体は，相互隣在的(nebeneinander)に作用を及ぼし合うという仕方で相互内存在(Ineinandersein)している」(中田, 1993, p.163)，と。そこで，中田の記述を手がかりとして，この時の優斗君と筆者の相互内存在の在り方について考察する。

優斗君と筆者が，アメンボというそれぞれにとって「問題となっている事柄に主題的に関与」しながら，すなわち，「『私がなす』という自我の能動的自己遂行」のレベルにおいて，相互に作用を及ぼし合っている(同上)ことは明らかである。しかも，単にその動きに追随しているだけでは，敏捷なアメンボを捕ることはできない。優斗君がアメンボを捕るためには，アメンボを上手に捕る可能性へと彼の身体が予め投げ込まれている必要がある。と同時に，彼のこの可能性を実現するための身体運動の可能性へと，筆者の身体もまた同時に投げ込まれている必要がある。このことは，この時の両者が，「『私がなす』ではなく『我々がなす』という意識をもって」(同, p.165)，同じ一つのキネステーゼ的身体として，アメンボを探すために身体を働かせていることを意味している。例えば，共にスムーズに歩き続けたり，アメンボに気づかれないように歩き続けることは，相手の歩き方や，水面の乱れを見たうえで，それぞれが次になすべき自分の歩幅の大きさや，歩くペース等々を調節することによっては可能とならない。そうではなく，両者は，二人の歩き方が一体となることと，歩き方の乱れによってアメンボに自分たちの接近が気づかれないこととを目指しつつ，握り合っている手を支点として，息を合わせながら歩かなければならない。

確かに，すでに引用したキネステーゼについてのフッサールの記述は，一人の人間の身体において生起している，知覚対象の現われと身体との一体的調和についてのものでしかなかった。他方，この記録に関する以上の考察は，アメンボを捕るという目的志向的な活動に最適な仕方で一体となった両者の身体が，互いの知覚対象の現われの変化とも調和しながら機能している，ということを示している。それゆえ，両者は，能動的意識の次元においてのみならず，身体の次元においても,「相互隣在的に調和した同じ一つのキネステーゼ的身体として機能」(同, p.166)する，という仕方で，一体的な相互内存在となっていた，といえる。それどころか，この時には，さらに以下のことも生じていたはずである。

アメンボを探している優斗君と筆者の身体は，歩調を合わせつつ川面に目をやる，という能動的で主題的な自己遂行を実現している。しかも，この時の両者の意識は，振動に敏感なアメンボを捕るために，「できる限り音を発しないような仕方で相互隣在的に作用を及ぼし合って」(同, p.148)もいなければならない。それゆえ，アメンボを捕るという可能性を目指しながら一体となっている両者の身体とそこに生じる身体感は，相互隣在的に作用を及ぼし合い，互いが浸っている満ち足りた気分や感情として両者に共有されているだけではない。音や振動をできるだけ発さないような仕方で相互隣在的に作用を及ぼし合っている優斗君と筆者

は，アメンボが逃げ出さないように，すなわち自分たちの身体運動が周りの世界に影響を与えないように，という仕方で静寂の雰囲気を醸し出しつつ，それを一体的に共に生きてさえいる。こうした仕方で両者が同じ一つの雰囲気に浸っている時には，たとえ繋いでいた手を離して身体的に接触することがなくなっても，同じ一つのキネステーゼ的身体として機能することが可能となるはずである。

アメンボを見つけて息をひそめた時の優斗君と筆者は，静寂の雰囲気を醸し出しつつ，この雰囲気に包まれていた。こうした雰囲気が，いわば背景としての地となることによって，図であるところのアメンボの姿や動きが，両者にとってより一層際立ってくる。しかも，こうした雰囲気を生きながらアメンボを感性的に知覚しつつ，それが現われるがままに現われさせている時，両者のキネステーゼ的身体は，物理的には離れているにもかかわらず，一体的に調和しつつ機能している。すなわち筆者は，直接アメンボをバケツですくわなくとも，彼の目線の動かし方や，彼の微かな身体的な動きと一体となりながら，優斗君と共にアメンボを捕ろうとしている。事実，この時の筆者は，アメンボを捕るという，優斗君がすでに投げ込まれている可能性が，彼の行為によって実現されるか否か，といったことさえをも予感しながら，彼と共に生きることができたのである。

以上のことから，この時の優斗君と筆者は，知覚対象であるアメンボや，アメンボを捕りたいという想いや，上述したような意味での空間的に伸び拡げられた雰囲気のみならず，さらには，アメンボを捕るという未来の可能性さえをも共同化していた，といえる。しかも，こうした共同化，すなわち自他の重なり合いは，Ｉでの記録の時期とは異なり，優斗君一人の能動性によって創り出されたのではない。以前の優斗君は，他者が彼の能動的な重なり合いを受け入れてくれたならば，共通の生を生きることが可能となっていた。他方，この記録における優斗君は，相互主観的な意識として存在しながら，自らの能動性に頼らない柔らかで自然な仕方で，すなわち，筆者と同じ一つの身体として，同じ一つの世界内で相互に作用を及ぼし合いつつ，アメンボという知覚対象やその動きさえをも一体となって創り上げるような仕方で，他者との間で共通の生を営むことができている。その結果，優斗君は，「己れにとってのリアリティーを伴いつつ己れの生の狭隘さから解放される」(同, p.171)，という仕方で，より豊かな生を体験することになる。というのも，優斗君一人で川に入ったならば，彼はこの記録時のような慎重で柔らかな動きをすることができず，アメンボを捕ることができなかっただろうからである。また，筆者一人ならば，アメンボを捕ろうとさえ想わなかった。すなわち，この記録における優斗君と筆者は，緊張感や喜び等の感情を生きることや，両者が一体となってアメンボを捕ることを可能ならしめた世界と，その世界内の対象を構成しつつ，こうした感情や世界や世界内の対象を体験する，といった，それまでは生きることができなかった生を他者と共に営んでいる。しかも，この時には，自分自身の可能性の範囲を超えた可能性を生きることが可能となるため，より一層豊かで，より多様性や柔軟性に充ちた生を営むことができる，ともいえるのである。

おわりに

本稿における以上の考察により，幼児期から児童期にかけての子どもにとって，他者と共に身体的に密接な関わり合いを生きることは，自他の身体機能や世界を重ね合わせる，という仕方で他者と同じ一つの世界を共に生きることによって，自らの世界の現われがリアルで安定したものへと変化することや，一人では生きることのできなかった豊かな生を，他者と共に柔らかな仕方で生きることを可能にしている，ということが明らかとなった。と同時に，初期の母子の一体的な関係が，母子の絆を創り出すことのみならず，相互主観的な世界を生きるために重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

本稿で考察した優斗君のように，母子のこうした一体的関係が家庭において経験できなかった子どもは，成長過程において，多くの場合自らの意識の能動性でもって，そのつど現に存在している他者との間でこうした関係を生きることになる。しかしそうであるからといって，優斗君は，以前に生きられなかった関係を生き直すという代償行為として，そのつどの他者との関係を生きているわけではない。本稿で考察した四つの時期における優斗君は，その時々の想いや意識の在り方に基づいて，他者との身体的な関わり合いを生きることにより，彼に固有の仕方で他者関係を育んでいった，と考えられるのである。

（指導教員　中田基昭教授）

付記　本稿は2004年度に東京大学大学院教育学研究科へ提出した修士論文「或る児童養護施設で暮らす子どもたちの他者関係」の一部を加筆・修正したものであ

る。修士論文のみならず，本稿でも事例として使わせていただくことを快く承諾してくださった学園長先生と施設長先生と職員の皆様に，この場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。

引用文献

ボウルビィ，J.『乳幼児の精神衛生』黒田実郎訳,岩崎学術出版社，1967

Husserl, E. "Zur Phänomenologie der Intersubjektivität Dritter Teil : 1929-1935", Martinus Nijhoff, 1973

Husserl, E. "Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch", Martinus Nijhoff,1952

Husserl, E. "Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentale Phänomenologie", Martinus Nijhoff,1962

金子保『ホスピタリズムの研究』，川島書店，1994

Landgrebe, L. "Reflexionen zu Husserls Konstitutionslehre," Tijdschrift voor Filosofie" 36e Jg. Nr3, 1974

中田基昭『授業の現象学』，東京大学出版会，1993

中田基昭「授業における共同化と相互主観性の現象学」，『現象学年報15』，1999

中田基昭「身体による世界の構成」，中田基昭編著『重障児の現象学』，川島書店，2003

注

1）Empfindnis の邦訳に際しては，立松弘孝氏の『イデーンⅡ－ⅰ』(みすず書房,2001)の訳語を使わせていただいた。